

## 古代東アジアの歴史叙述

### に関する序説

——『史記』を手がかりとして——

奥田 尚

はじめに

日本古代の史書の『記』・『紀』を読めばすぐに気づくことだが、酷似したテーマの物語がしばしば繰り返される。たとえば、神武記紀にはいわゆる「神武東征」物語がある。この物語は周知のように、日向を発した神武らは、瀬戸内海を東進して大阪地域に上陸、ナガスネヒコと戦う。兄のイツセは負傷し、神武らは南へ迂回して熊野に上陸し、北へ向かって山中を進軍し、ヤマトへ入ってナガスネヒコを服属させる。瀬戸内海を東進して大阪

地域に上陸し、敵対者と戦って苦戦するというモチーフは、神功記紀の応神がカゴサカとオシクマの反乱を平定した物語と酷似する。

記・紀においては物語が繰り返されているだけではなく、王者たちの人名もまた、意味上での根源的な一致という形で、繰り返されている。上記の例でいえば、神武のヒコホデミという名は、ヒコ（彦）＋ホ（稻穂と火）＋デ（出る）＋ミ（霊）であり、「稻穂と火の霊」である。応神のホムタワケは、ホ（稻穂と火）＋ムタ（共に・一緒に）＋ワケ（人名標識）であり、「稻穂と火と一緒にのヒト」という名である。神武の名も応神の名も「『ホ』のミコ」であり、同一名である。

記・紀における物語の分有、たとえば記における垂仁とその皇子のホムチワケ（ホムツワケ）のフタマタフネでの船遊びは、紀における履中とその后妃のフタマタフネでの船遊びとして同一である。一つの物語が記ではホムチワケの物語として、紀では履中の物語として配されている。一物語が記と紀に分有されている関係である。

これも前者がホムチワケつまりホムムチ（親しい貴人）＋ワケ、ホムムツ（睦まじい）＋ワケで、『ホ』と仲のよいヒト」であり、後者の履中がイザホワケつまりイザ

(誘う) + ホ + ワケで、『ホ』に誘うヒト」なのであり、『ホ』のミコ」という同一名なのである。その名は、上記の神武ヒコホホデミ・応神ホムタワケの名と根源的に一致する『ホ』のミコ」なのである。

記・紀における物語のモチーフの繰り返し、物語の分有、それらに關係する王者名が『ホ』のミコ」に收斂することは、記・紀が一人の『ホ』のミコ」の物語から、種々に変形を加えて王者たちの物語と人名を作り上げ、それを骨格として『日本』の歴史」を叙述したものであることを示している。

以上に概略を示した仮説について筆者は、九二年に『記紀の王者像』（松籟社）として公刊したが、現在にいたるまでまったく反応を得ないでいる。そのこと自体は仕方がないこととして、同書をまとめているときに気になりながら放置した問題の一つに、史記をはじめとする古代の東アジアの歴史書にも、やはりモチーフの繰り返しがみられる問題がある。

中国古代史について専門外の立場から論及するのは非常に困難であり、かつ以下に述べることなどはすでに数多くの関係論考があることでもあろうが、『史記』を手がかりに筆者が古代中国の歴史記述の繰り返しについて

気になっていることを述べてみたい。

### 一 宮崎市定氏による『史記』の説話の繰り返しの指摘

『史記』の桀王、紂王、幽王について、それぞれに配された女性との説話が繰り返しであることについては、すでに宮崎市定氏が指摘しているところである。少し長くなるが宮崎氏の指摘を引用しておきたい。

普通に中国の歴史事実の確実なところは、殷周革命まで遡り得るとされているようである。古伝によれば殷はその祖先湯王から数えて二十八代目に紂王が現われ、妣己を寵愛して政治が紊れた。折しも西方に周が起るが、その先祖は山間から南下し、渭水の平野に住居を定めて都市国家を建て、文王の時に強大となり、その子武王は近隣の異民族を狩り集めて殷を攻め、その都河南省の商邑を陥れて紂王を殺した。武王は併し本拠の陝西省に帰り鞏京の都を守り、十二代の幽王が滅びるまで続き、これを西周と称した。武王の子成王の時、叔父の周公は洛邑を築いて別都とし、東方の諸侯を監視する探題としたが、幽王の滅亡に際し、その子の平王が逃れて此処に都し、以後を東周と呼ぶ。

さてこの紂王であるが、これに類似する説話がその前にも、その後にも存在する。前のものは夏の桀王の物語で、これによると桀王は末喜を溺愛した為に国が乱れて殷の湯王に滅ぼされたと伝えられ、後のものは周の幽王の物語で、これは幽王が褒姒を寵愛し、その言に従ったため人心を失い、異民族の侵入を蒙って滅亡したと言う。この三者は同一の根源から生じたに違いない、そんなら何れが本歌であるかと言うに、このような場合は最も近い時代のものが本であり、それが次々に古い時代に反映させられて、幾つもの替歌が出来たものと思われる。するとこの場合、幽王説話が最初のものであり、紂王説話は第二次の反映伝説、桀王説話は第三次の反映伝説であろうと推測される。これは単に小説的な部分だけに止まらず、史実として語られている英雄の伝記の部分に互っても反映があるに違いないのである。

紂王説話と幽王説話を比較すると、幽王説話の方がずっと現実味がある。第一に幽王以後の歴史はすぐ後に春秋時代が続き、後世の歴史と連帯性がある。ところが紂王説話はそれから後、周の幽王の頃までの間に大きな断絶があるにも拘わらず、この部分だけが例外

的にはっきりとした影像となつて、それが遠い過去の星雲の中に浮び上っているのは、何としても不自然である。尤も幽王のすぐ前に宣王の物語があるが、これもよく観察すると、実は孤立した説話で、前にも後にもうまく接続しない<sup>1)</sup>。

宮崎氏はこのように、夏の桀王と末喜の物語、殷の紂王と妲己の物語、周の幽王と褒姒の物語は繰り返しであると指摘している。宮崎説では、幽王と褒姒との物語が最初に作られ、ついでそれが紂王に投影されて妲己との物語となり、さらに桀王に投影されて末喜との物語となったとする。それぞれの物語について、順次確認していくこととし、まず桀王と末喜の場合からはじめたい。

## 二 本紀の桀王と末喜

「桀」は『史記』の夏本紀の本文には、次の一条にかみえない。

### (1) 『史記』卷一・夏本紀

孔甲崩、子帝皋立。帝皋崩、子帝癸立。帝癸崩、子帝履癸立、是為桀。帝桀之時、自孔甲以來而諸侯多畔夏、桀不務德而武傷百姓、百姓弗堪。迺召湯而因

之夏台、已而釈之。湯修德、諸侯皆歸湯、湯遂率兵以伐夏桀。桀走鳴条、遂放而死。桀謂人曰、「吾悔不遂殺湯於夏台、使至此。」湯乃踐天子位、代夏朝天下。

まず指摘できる点は、ここには末喜の名は出てこないことである。この部分の大意は次のようになる。

〔第四代の夏王の〕孔甲が死去し、その子の皋（こう）が即位し、皋が死去して子の発が即位し、発が死去して子の履癸が即位した。（この第十七代にあたる）履癸が「桀」である。帝桀の代になっても、孔甲の時以来、諸侯の多くが夏氏の皇帝に背く状態であったのに、桀王は徳を修めることに務めずに、百官を武力で傷めつけたので、百官は堪えきれなかった。（桀王は）諸侯の一人の湯（とう）王を召して、夏台（という獄）に入れながら、しばらくして湯王を釈放したなどのことがあった。湯王は徳を修めることにつとめ、諸侯は皆、湯王に服従するところとなったので、湯王は遂に兵を率いて夏王の桀王を伐った。桀王は敗れて鳴条（山西省）に逃れ、遂には放逐されて死亡した。桀王は死に際してある人に、「湯を夏台（の獄）に入れた時に殺さなかったために、自分が死ぬような結果に至ったことを後悔している」と

語った。このようにして湯王は天子の位につき、夏に代わって天下を支配した。

ここでは「徳」を修めようとつとめなかったために、桀王は打倒され、「徳」を修めることにつとめたために、湯王は天下を支配することとなったとしている。『史記』夏本紀においては、「徳」を天下を失うか得るかの基準軸に「徳」を設定して、夏の滅亡と殷の興隆が描かれていることをまず指摘しておきたい。

桀王で夏王朝は滅亡するから、湯王の開いた殷王朝の歴史を描く『史記』殷本紀にも、桀王の滅亡に関する記述がある。

## (2) 『史記』卷三・殷本紀

当是時、夏桀為虐政淫荒、而諸侯昆吾氏為乱。湯乃興師率諸侯、伊尹從湯、湯自把鉞以伐昆吾、遂伐桀。湯曰、格女衆庶、來、女悉聽朕言。匪台小子敢行拳乱、有夏多罪、予維聞女衆言、夏氏有罪。予畏上帝、不敢不正。今夏多罪、天命殛之。今女有眾、女曰、我君不恤我衆、舍我鬻事而割政。女其曰、有罪、其奈何。夏王率止衆力、率奪夏國。有衆率愈不和、曰、是日何時喪。予與女皆亡。夏德若茲、今朕必往。爾尚及予一人致天之罰、予其大理女。女母不信、朕不

食言。女不從誓言、予則帑僇女、無有攸救。以告令師、作湯誓。於是湯曰、吾甚武、號曰武王。桀敗於有城之墟、桀奔於鳴條、夏師敗績。湯遂伐三閭、俘厥宝玉、義伯、仲伯作典宝。湯既勝夏、欲遷其社、不可、作夏社。伊尹報、於是諸侯畢服、湯乃踐天子位、平定海內。

この時に夏の桀王は、残虐な政治を行い、淫荒（酒色にふけてすさむ）だったので、諸侯の昆吾氏は反乱を起こした。湯王は軍を興して諸侯を率い、伊尹（いん）〔湯王の重臣で一時は夏の桀王にも仕えていた人物〕も湯王に従った。湯王は自ら鉞（武器、指揮権）を取り、昆吾氏を伐ち、遂に桀王をも伐とうとした。

湯王は、「格（きた）れ、汝ら衆庶（あなたがた）よ、来って朕が言を聴け。台（われ）小子（しょうし）〔台小子で自分のこと・私〕は、あえて〔桀王を伐つという〕乱を行なおうとするものではない。夏には罪が多く、私は汝らが夏氏の有罪をいいあっていることを聞いている。私は上帝〔天上の神・天帝〕を尊敬しているので、〔天帝の意向に従って〕あえて正さざるを得ないのである。今、夏氏には罪が多く、天はこれ〔桀王〕を殛（ころ）せと〔私に〕命じているのだ。今、汝有衆（あなたがたが

た）よ、汝らは『我が君（桀王）は私たちを救わず、収穫を捨てさせ酷い政治を行なっている』という。汝らは『夏の桀王は〕有罪なのに、どうすればいいのか』ともいう。〔こうした声があるのに〕夏王（桀）は〔臣下を〕率いて人々の〔本来持っている〕力を止め、夏の国（の人々）から奪いつづけている。その臣下も怠り、〔桀王に〕和合しないで、『この太陽（のような桀王）はいっ衰えるのか、〔衰えるのであれば〕自分も汝ら（支配下の人々）もすべて亡びてもよい』といっている。夏の徳（の状態）はこのようなので、今、朕は必ず往かねばならない〔往って桀王を討伐しなければならぬ〕。爾（なんじ）〔汝〕ら、尚（ねが）〔願〕わくば、私とともに天の罰を〔桀王に〕あたえてほしい。私は汝らに大いに〔褒賞を〕あたえよう。汝ら、信ぜざることなかれ。朕はいったことは必ず守る。汝らが〔以上の朕の〕誓言に従わなければ、朕は汝らの子孫までも殺害して、許すことは決してないであろう』といった。以上のことを軍団に布告したのが、「湯誓（とうせい）」（という書）である。

ここで湯王は、「自分は非常に武である〔武に優れている〕」といい、武王と号した。

桀王は有城氏の旧墟に敗北し、桀王は鳴條（山西省）

に「追われ」ひしめき、夏の軍勢は完全に破れさった。

湯王は三襲（山東省）まで「桀王を」追撃して、「桀王の持っていた」宝玉を奪い取った。「その宝玉について、湯王の臣下の」義伯と仲伯は、「典宝」（という書）を作った。

湯王はすでに夏に勝ったので、夏の社を（自分の本拠地である商の地に）遷そうとしたが、「遷すことを」不可なりとして、「夏社」（という書）を作った。

伊尹は、「湯王の夏に対する勝利を天下に」報じた。ここに諸侯はすべて湯王に服属した。「湯王は」すなわち天子の位を踐（ふみ）み（即位し）、海内「天下」を平定した。

以上が大意であるが、桀王は「残酷な政治を行い、酒色にふけてすさんで」おり、それが「有罪」であって、こうしたことが「夏の徳（の状態）」はこのようなので」とまとめられている。(1)も(2)も、「徳」が基準として、夏王朝の桀王の滅亡と殷王朝の湯王の興起が描かれていることが確認できる。

(1)にも桀王の相手の末喜の名はなかったが、この(2)にも末喜の名はない。本紀の本文の限りでは、桀王と末喜の関係は、わずかに(2)に「淫荒」とのみ記される部

分に暗示されているにすぎない。桀王と末喜の物語は『史記』では、列伝の部分にみえるのである。それはしばらく後にまわして、次に紂王と妲己を『史記』に見よう。

### 三 本紀の紂王と妲己

紂王と妲己が『史記』の本紀の本文にみえるのは、

(3)・(4)の二条である。

(3) 『史記』卷三・殷本紀

帝紂資弁捷疾、聞見甚敏。材力過人、手格猛獸。知足以距諫、言足以飾非。矜人臣以能、高天下以声、以為皆出己之下。好酒淫樂、嬖於婦人。愛妲己、妲己之言是從。於是使師涓作新淫聲、北里之舞、靡靡之樂。厚賦稅、以實鹿台之錢、而盈鉅橋之粟。益收狗馬奇物、充仞宮室。益廣沙丘苑台、多取野獸蜚鳥置其中。慢於鬼神。大最樂戲於沙丘、以酒為池、縣肉為林、使男女僕、相逐其間、為長夜之飲。

大意は次のようになる。帝紂の資質は弁舌にすぐれた上に機敏であり、聞いたり見たりすることにはなほだ敏であった。能力も力も人並みはずれてすぐれ、素手で猛

獸をたおすこともできた。知は臣下の諫言を防ぐことができるほどであり、言は自分の非でさえ飾りたてるほどであった。臣下には自分の能力をほこり、自分の名声は天下に高いとし、人々はすべて自分よりも下位であると考えていた。酒を好み淫を樂しみ、女性がとくに好きであった。なかでもことに妲己を愛し、妲己の言であればすべてに従った。

〔音楽〕師の涓（けん）に新たに、みだらな歌謡の「北里の舞」・「靡靡の樂」を作らせた。賦税を重くして、鹿台（ろくだい）〔財宝をしまふ場所〕に金銭をみだし、鉅橋（きょきょう）〔という名の倉庫〕に粟〔穀物〕をみだし、ますます狗〔犬〕や馬や珍奇な物を集めて宮室にみたした。

沙丘（さきゅう）〔という名の離宮〕の苑〔園〕と高台を拡張し、野獸や飛鳥をその中にいれた。鬼神をあなどり〔おそれることなく〕、大勢を砂丘離宮に集め戯れて樂しんだ。酒を入れた池を作り、肉をかけた林を作り、男女を裸にして互いに追いかけさせ、昼夜の別なく長い酒宴をおこなった。

#### (4) 『史記』卷三・殷本紀

紂愈淫乱不止。微子數諫不聽、乃與大師・少師謀、

遂去。比干曰、為人臣者、不得不以死爭、迺強諫紂。紂怒曰、吾聞聖人心有七竅、剖比干、觀其心。箕子懼、乃詳狂為奴、紂又囚之。殷之大師・少師乃持其祭樂器奔周。周武王於是遂率諸侯伐紂。紂亦發兵距之牧野。甲子曰、紂兵敗。紂走入、登鹿台、衣其宝玉衣、赴火而死。周武王遂斬紂頭、縣之太白旗。殺妲己、殛箕子之囚、封比干之墓、表商容之闕。封紂子武庚祿父、以統殷祀、令修行盤庚之政。殷民大說。於是周武王為天子。

紂王の淫乱はいよいよ止まらなかった。微子（びし）〔紂王の異母兄〕はしばしば諫言したが、聴きいれられず、そこで大師〔樂〕を掌る長官・少師〔次官〕と謀って、ついに〔殷を〕去った。比干（ひかん）〔紂王の父の弟〕は、「臣下たる者、死をもってしても〔諫めて君主と〕争うべきだ」といい、強く紂王を諫めた。紂王は怒って、「比干のような」聖人の心には七つの穴があると聞く」というと、比干を解剖して、その心を観た。箕子（きし）は、「紂王が比干を殺したことを」おそれ、いつわって狂をよそおい奴隸身分となったが、紂王は箕子をとらえて囚人とした。殷の大師と少師は、〔殷の〕祭り用の樂器を持って、周に逃げこんだ。

周の武王はついに諸侯を率いて紂王を伐った。紂王もまた軍勢を発して牧野（ぼくや）〔河南省〕に〔武王の軍を〕防ごうとした。甲子（かっし）の日に紂王の軍は敗れた。紂王は鹿台（宮中の財宝の保管場所）に逃げ込み、宝玉の衣を着て、火中に飛び込み自殺した。

周の武王は、紂王の頭を斬り取り、大きな白旗にかかげた。妲己を殺し、囚人となっていた箕子を釈放し、比干をきちんと墓におさめ、商容（しょうよう）〔賢者として紂王を輔佐し、人々に慕われたが、紂王により罷免された人物〕の住んでいた家の門に〔その善行をほめたたえる〕表をかかげた。紂王の子の武庚禄父（ぶこうろくほ）を封じて、殷の祀（まつり）を続けさせ、〔殷の中興の祖の〕盤庚（ばんこう）の政（まつりごと）をおこなわせたので、殷の人々は大いによろこんだ。ここに周の武王は天子となった。

紂王の妲己は、桀王の末喜と異なり、本紀に人名は明記されている。しかし、(3)の妲己は、「愛妲己」、「妲己之言是從」とだけであり、(4)も「殺妲己」というだけで、具体性をまったく欠いた記述である。また、妲己も末喜と同様に本紀以外では列伝の部分にでてくるが、後に検討することとして、次に幽王と褒姒を見よう。

#### 四 本紀の幽王と褒姒

幽王と褒姒は、『史記』の周本紀には、幽王三年条にまとまって記されている。一連の記述ではあるが、長文なのでA・B・C・Dに段落を分けて示したい。

##### (5) 『史記』卷三・周本紀・幽王三年条

三年、

A 幽王嬖愛褒姒。褒姒生子伯服、幽王欲廢太子。

太子母申侯女、而為后。後幽王得褒姒、愛之、欲廢申后、并去太子宜臼、以褒姒為后、以伯服為太子。

B 周太史伯陽讀史記曰、周亡矣。昔自夏后氏之衰也、有二神龍止於夏帝庭而言曰、余、褒之二君。

夏帝卜殺之與去之與止之、莫吉。卜請其幣而藏之、乃吉。於是布幣而策告之、龍亡而幣在、櫝而去之。夏亡、伝此器殷。殷亡、又伝此器周。比三代、莫敢發之、至厲王之末、発而觀之。幣流于庭、不可除。厲王使婦人裸而譟之。幣化為玄黿、以入王後宮。後宮之童妾既訛而遭之、既笄而孕、無夫而生子、懼而棄之。宣王之時童女謠曰、繫弧箕服、實

亡周国。於是宣王聞之、有夫婦売是器者、宣王使執而戮之。逃於道、而見鄉者後宮童妾所棄妖子、出於路者、聞其夜啼、哀而收之、夫婦遂亡、葬於褒。褒人有罪、請入童妾所棄女子者於王以贖罪。

棄女子出於褒、是為褒姒。当幽王三年、王之後宮見而愛之、生子伯服、竟廢申后及太子、以褒姒為后、伯服為太子。太史伯陽曰、禍成矣、無可奈何。

C 褒姒不好笑、幽王欲其笑、万方、故不笑。幽王為烽燧・大鼓、有寇至則舉烽火。諸侯悉至、至而無寇。褒姒乃大笑、幽王說之、為數舉烽火。其後不信、諸侯益亦不至。

D 幽王以號石父為卿、用事、国人皆怨。石父為人佞巧善諛好利。王用之、又廢申后、去太子也。申侯怒、與繪・西夷・犬戎攻幽王。幽王舉烽火徵兵、兵莫至。遂殺幽王驪山下、虜褒姒、盡取周賂而去。於是諸侯乃即申侯而共立故幽王太子宜臼、是為平王、以奉周祀。

Bは褒姒に関する一種の怪異譚で、司馬遷がこの怪異譚を本紀に採用したこと自体、問題をはらむものである。この怪異譚の大意と考察は後にまわし、B以外的大意を記しておく。

A 幽王は褒姒をことに愛した。褒姒は子の伯服を生んだので、幽王はそれまでの太子を廃したいと思うようになった。それまでの太子の母は申侯の娘であり、皇后になっていた。後に幽王は褒姒を得、褒姒のみを愛し、申皇后を廃し太子宜臼（ぎきゅう）を追放して、褒姒を皇后とし伯服を太子とした。

C 褒姒は笑うことを好まなかったが、幽王はその笑顔を欲して、さまざまに手を尽くした。しかし、ことさら褒姒は笑わなかった。幽王は烽火と太鼓を設置して、敵が侵入してくると烽火をあげることにしていた。〔烽火をあげたので〕諸侯はすべて集合したが、敵の侵入はなかった。〔諸侯があわてて集合する様子を見て〕褒姒は笑ったので、幽王は大喜びでしばしば烽火をあげさせた。しだいに〔烽火の合図は〕信用されなくなり、諸侯もますます集合しなくなった。

D 幽王は號石父（かくせきま）を卿として政事を行なわせたものの、国人（国の人々）はすべて彼を怨むようになった。〔號〕石父の人となりが佞（おもね）りに巧みで、諛（へつらい）を善とし、利を好んだからである。それなのに幽王は石父を用いて、申皇后を廃し太子を追放したのである。〔皇后と太子の実家にあたる〕申侯は

これを怒り、繒（そう）（国の名）と西夷と犬戎とともに、幽王を攻撃した。幽王は烽火をあげて兵を招集したが、「烽火を信用しないようになっていたので」兵は集まらなかった。ついに〔申侯らは〕幽王を驪山に殺し、褒姒を捕虜とし、ことごとく周の財宝を奪って去った。ここに諸侯は申侯に即（つ）いて、幽王のものと太子宜臼を共立して、平王として周の祀り〔支配〕をつづけた。

以上のA・C・Dの褒姒の記述には、桀王の末喜や紂王の妲己とは比較にならないほどの具体性がある。褒姒の怪異譚のBがなければ、褒姒の存在は確実な史実と判断して差し支えない。Bの詳細は後にまわすが、Bでは褒姒の父は「龍」である。この点では褒姒を実在の女性と見なすわけにはいかない。これについては後述することとして、本紀以外での末喜・妲己・褒姒について『史記』の記述を調べよう。

## 五 本紀以外の末喜・妲己・褒姒

次掲の史料は「外戚伝」の冒頭部分にあたる。これも長文なので段落分けをして掲げることとしたい。

### (6) 『史記』卷四九・外戚世家第一九

A 自古受命帝王及繼体守文之君、非独内德茂也、蓋亦有外戚之助焉。

B 夏之興也以塗山、而桀之放也以末喜。殷之興也以有娀、紂之殺也嬖妲己。周之興也以姜原及大任、而幽王之禽也淫於褒姒。

C 故易基乾坤、詩始閟雎、書美釐降、春秋譏不親迎。夫婦之際、人道之大倫也。礼之用、唯婚姻為兢兢。夫樂調而四時和、陰陽之變、万物之統也。

可不慎與。人能弘道、無如命何。甚哉、妃匹之愛、君不能得之於臣、父不能得之於子、況卑下乎。既驩合矣、或不能成子姓、能成子姓矣、或不能要其終、豈非命也哉。

D 孔子罕称命、蓋難言之也。非通幽明之變、惡能識乎性命哉。

E 太史公曰、秦以前尚略矣、其詳靡得而記焉。

F 漢興、呂娥姁為高祖正后、男為太子。及晚節色衰愛弛、而戚夫人有寵、其子如意幾代太子者數矣。及高祖崩、呂后夷戚氏、誅趙王、而高祖後宮唯獨無寵疏遠者得無恙。

Eまでが緒言すなわち冒頭の言である。Fは外戚伝の

本体部分の冒頭にあたるが、説明の必要上から掲げておいた。

A 古くから命を受けた帝王、およびその体（たい）を継ぎ祖先の法を守りつたえた君主は、たんに自分が徳を育てただけではなく、外戚の助けがあったためにちがいない。

B 夏王朝が興隆したのは、〔禹の後妃「僂（きょう）の属した」塗山「氏の助け」により、桀王が放たれた「権力を失った」のは末喜のせいである。殷王朝が興ったのは、〔始祖の「契（せつ）の母「簡狄（かんてき）の属した」有娥（ゆうじゅう）氏の助力」により、紂王が殺されたのは愛していた妲己のせいである。周王朝が興ったのは、〔始祖の「后稷（こうしよく）の母「姜原（きょうげん）」の属した有部（ゆうたい）氏の援助」ならびに「文王の母」大任（だいじん）」により、幽王が捕えられ「殺されて、周が実権を失し」たのは「幽王が」褒姒に淫したためである。

C ゆえに「易経」の基本は、「天であり皇帝である」乾（けん）と「地であり后妃である」坤（こん）であり、「詩経」は「后妃の徳を記す」「閔睢（かんしゅ）」篇にはじまり、「書経」は「堯が自分の二人の娘を舜に嫁がせ

善良な婦徳をおさめさせたという」釐降（りこう）」ということを褒め、「春秋」は「嬀が嫁を親しく迎えるという」親迎（しんげい）」をしなかったことを諍っている。

このように夫婦の関係というのは、人道の大倫（人の人たる道の中心倫理）である。「礼」もつきつめれば、婚姻についての戒め慎みであることができる。音楽についても、その調べがいつも「理想の夫婦のように」和合していると、「春夏秋冬の」四時も順調になるのである。陰陽の変化というものは、万物を通じての根本である。慎まなければならない。人は人の道は広めることはできても、「命（めい）」「天命」だけはどうすることもできない。はなはだしいものの代表が、配偶者との愛である。君主といえどもそのような愛を臣に求めることはできないし、父といえども子にそのような愛を求めることはできない。「君や父のように力を持っていない」卑下の（一般の）ものにとっではいうまでもないことである。すでに夫婦の情愛が合っている、子孫をもうけることができない場合もあり、子孫をもうけられなくても、その夫婦の最後まで善美を貫けない場合もある。このようなことがどうして天命でないことがあるのか。

D 孔子が天命についていうことがまねなのは、天命

は説明したい存在だからであろう。「この世のありとあらゆる存在である」幽明の変化に通じていなくては、どうして人性と天命を識ることができようか。

E 太史公〔司馬遷〕は次のようにいった。秦（の天下統一）以前のことははるかに遠い昔なので省略した。その〔時代の〕詳細は、記したものがいいからである。

F 漢王朝が興ると、呂（りよ）〔氏の〕娥姁（がく）が高祖〔劉邦〕の正后となり、二人の間の男子〔盈（えい）〕、後の恵帝〕が太子となった。晩年になると〔呂后の〕容色が衰えて愛もゆるんで、戚夫人を寵愛し、夫人との間の子の「如意（にょい）」を何度も代えて太子にしようとした。高祖が死去するや、呂后は戚夫人とその一族を皆殺しにし、趙王（如意）も誅殺した。こうして高祖の後宮関係者では、高祖に寵愛された者は誰もいなくなり、疎遠な者だけが無事に残ることができた。

前に述べたようにFは、漢王朝が成立した時の外戚についての伝である。実現しなかったとはいえ、高祖劉邦は寵妃戚夫人との男子を太子にしようとしたことがあった。これは(5) Aに見た幽王が皇后申氏と太子宜臼を廃して、寵妃の褒姒を皇后とし伯服を太子とした記述と、事の成否を別にすれば、同一のモチーフである。このE

にあるように、太史公司馬遷自からが、秦王朝より前は古すぎて記載されたものがないので省略すると宣言していることからすれば、(5) Aの申皇后の廃后と宜臼の廃太子、つまり褒姒の皇后就位と伯服の立太子は、史実かどうか疑われる。ましてや褒姒には(5) Bのように怪異譚が付属するのである。

末喜と妲己については、本紀以外の『史記』の本文にみえるのは、上掲の(6)のみである。次に(5) Bの褒姒の怪異譚を考えてみたい。

## 六 褒姒の怪異譚

(5) Bの大意は次のようになる。

周の太史〔記録官・歴史編纂官〕の伯陽は、史記〔一般名詞で過去の記録類のこと〕を見て、「周は亡びる」と予言した。〔記録によれば〕昔、夏王朝が衰えかけたころ、二匹の神龍が出現し、夏の宮廷に降りてとどまり、「自分たちは褒の国の二人の君主」であると告げた。夏の皇帝は、龍を殺すのがよいか、去らせるのがよいか、とどまらせるのがよいかを占わせたところ、すべて「吉（きち）ではない」との占いの結果であった。そこで

「精気の集合ともいえる龍の吐く」「療（あわ）」をもらって、それを宮中に収めておくのはどうかと占わせると、「吉」であった。そこで幣帛を重ね、策（文書）に記して（龍に）告げたところ、龍は「療」だけを残して姿を消したので、「その「療」を」横（はこ）に入れて貯蔵した。

夏王朝が亡びたとき、この器は殷王朝に伝承され、殷が亡びると、周に伝承された。「夏・殷・周」の三代の間は、あえてこの器は開かれなかった。「周が衰えかけた」厲王（第一代）の末になって、「この器を」開いて（龍の精気の「療」を）観ようとした。「療」は宮廷の庭に流れ出して、取り除くことができなかった。厲王は婦人たちを裸にして、その「療」のまわりで騒がせた。「療」は、玄龜（げんげん）「玄妙なトカゲ」と化して、厲王の後宮に走りこんだ。後宮の齒の生え替わった年齢（七歳ころ以上）の童女は、この玄龜と出会ったが、やがて筭（かんざし）を挿す年齢（一五歳ころ）になると受胎し、夫がないまままで子を生み、そのことを懼れてその子を捨てた。

宣王（第二二代）の代になって、「槃弧箕服（えんこきふく）（山桑（やまぐわ）の木の弓と箕（き））の木でつ

くった矢を入れる道具の箝（えびら）」が周を滅ぼすことになる」と歌う童女があり、宣王がそれを聞いたところ、ちょうど槃弧箕服を売っている夫婦があった。宣王はこの夫婦を捕えて殺そうとしたので、夫婦は逃げ出した。逃げる途中で、さきに後宮の女が捨てた妖（あや）しい子が路で夜泣きをしているのを聞き、かわいいそうなのでその子を連れて褒の国に逃げ込んだ。

（やがて）褒の王に宣王に対する落ち度があったときに、後宮の女に捨てられた女子を宣王に進上して、罪をつぐなう代償にした。捨てられた女子は、褒から献上されたので、「褒姒（ほうじ）」とよばれた。

幽王（第一三代）の三年にあたって、幽王は後宮に行き、褒姒を見て愛し、子の伯服が生まれた。ついに（幽王は）申皇后と太子を廃して、褒姒を皇后とし、伯服を太子とした。（以上の記録を読んだ）太史の伯陽は、「禍（わざわい）はできあがってしまっており、もうどうすることもできない」と述べた。

以上の褒姒の怪異譚の「龍」については、『史記』夏本紀の「帝孔甲（こうこう）（第一四代皇帝）」に対応する記事がある。

(7) 『史記』卷二・夏本紀

帝孔甲立。好方鬼神事淫乱。夏后氏德衰、諸侯畔之。天降龍二。有雌雄。孔甲不能食。未得豢龍氏。陶唐既衰、其後有劉累、學擾龍於豢龍氏、以事孔甲。孔甲賜之姓、曰御龍氏、受豕韋之後。龍一雌死、以食夏后。夏后使求。懼而遷去。孔甲崩。

帝孔甲が即位した。鬼神に並ぼうとし〔自分をわきまえず〕、淫乱であった。〔有徳の禹にはじまる〕夏后氏の徳は衰え、諸侯には背くものがあらわれた。天は雄と雌の龍を降したが、孔甲は養うことができず、また〔龍を養うことを知っている〕豢龍（かんりょう）氏を探し出すこともできなかった。〔聖帝堯の系統である〕陶唐はすでに没落していたが、その子孫の劉累（りゅうるい）という人が、豢龍氏に龍を飼いならす方法を学んでおり、その人を孔甲に仕えさせた。孔甲はその劉累に「御龍（ぎりょう）氏」という姓を与え、〔かつて火の神で双龍に乗るといふ神話も持つ祝融（しゅくゆう）の子孫が封じられた〕豕韋（しい）の地を授けた。龍の雌が死んでしまい、それを夏后に食させたところ、夏后はさらに食したいと要求した。〔それに応じることができず、夏后を〕懼れて〔劉累は〕その地から去っていった。やが

て孔甲は死去した。

夏本紀は第四代の帝中康に簡単な記事が付された後は、「中康崩、子帝相立。帝相崩、子帝少康立。帝少康崩、子帝予立。帝予崩、子帝槐立。帝槐崩、子帝芒立。帝芒崩、子帝泄立。帝泄崩、子帝不降立。帝不降崩、弟帝扁立。帝扁崩、子帝廩立。帝廩崩、立帝不降之子孔甲。是為帝孔甲。」という単に系譜を羅列したに過ぎない記事があつて、(7)につづく。(7)の末尾に「孔甲崩」まで掲げておいたが、この「孔甲崩」は(1)の「孔甲崩」と同一である。(7)に直接に(1)がつづき、(7)についてみたように、桀王の時代の記述になる。

(7)の帝孔甲と龍のエピソードは、帝孔甲でなければならぬ必然性はなく、本来が(5) Bに「昔自夏后氏之衰也、有二神龍止於夏帝庭」とあるように、帝の名前を特定しない物語であつた。それを司馬遷が帝孔甲の時代にあてはめたのは、親子関係で継承されてきた帝位が第一二代の帝扁で兄から弟への継承となり、第一三代へは父子継承であるものの、帝孔甲へは従兄弟への継承であるという継承の乱れを「夏后氏之衰」と捉えたためにちがいない。

というよりもむしろ逆に、司馬遷は、(5) Bの「周太

史伯陽」の言を重視して、それに対応する記事を夏本紀の「帝孔甲」の部分にも挿入して、「周太史伯陽」の言の首尾を一貫させたのである。

ところでこの帝孔甲に天が龍を降したという物語は、

『春秋左伝』昭公一九年条に、魏献子と蔡墨の「龍」の出現に関する問答があり、その蔡墨の言に次のように記されている。

(8) 『春秋左伝』昭公一九年条

故帝舜氏世有畜龍。及有夏孔甲、擾于有帝。帝賜之乘龍、河・漢各二、各有雌雄。孔甲不能食、而未獲豢龍氏。有陶唐氏既衰、其後有劉累、學擾龍于豢龍氏、以事孔甲、能飲食之。夏后嘉之、賜氏曰御龍、以更豢韋之後。龍一雌死、潛醢以食夏后、夏后饗之、既而使求之。懼而遷于魯吳、范氏其後也。

ここに掲げた部分の直前には、豢龍氏の成立事情が語られており、それによれば、多数の龍を養育して帝舜につかえた人物が、舜から姓曰董という姓と豢龍という氏を与えられ、馮川（そうせん）に封じられ、馮夷（そうい）氏はその後であるとある。それにつづけて、この部分が出てくる。

帝舜の世には龍が飼われていた。夏王朝には帝孔甲が

あり、帝（天帝の心）によくなじんだので、天帝は乗龍（二対の龍）を（帝孔甲に）賜わったが、黄河と漢水にそれぞれ二匹、それぞれ雌と雄であった。以下は、(7) とほぼ同じである。

司馬遷がこの(8)により、龍の話を帝孔甲に付属させた可能性は否定できないが、(8)の場合の帝孔甲は天帝から龍を与えられるほど徳を持つ存在であり、司馬遷の描いた(7)の「夏后氏徳衰、諸侯畔之」とは正反対である。やはり前に記したように、「周太史伯陽」の言により、それを帝孔甲に掲げたのであろう。

(5) Bの『史記』周本紀の褒姒の怪異譚は、『国語』鄭語にもほぼ同文がある。それによれば、龍の出現については「夏之衰也、褒人之神化為二龍、以同于王庭、而言曰、余、褒之二君也」とあり、夏王朝の衰退のときに龍が出現したとする。この点は『史記』と一致するが、国語は一貫して「褒姒」の名を記していない。もっとも『国語』は、廃后と廢太子を記す部分に、この女性の立后を名を記さずに記すものの、この女性の生んだ子の立太子の記事には「伯服」という名を記す。

『左伝正義』の昭公二六年の「正義」を見ると、伯服は王となって、平王（廢太子の宜臼）と併立した時期が

二一年に及んだとある。この説に信用できる典拠がある  
とすれば、「伯服」の名が残るのは当然である。しかし、  
この「正義」には、伯服と並んで「褒姒」の名が見える  
ので、「褒姒」という名の起源については、『国語』に名  
が見えないことをあまり重視すべきではないのかもしれない。

褒姒という名の「褒」は国の名、「姒」は姓であると  
されている。『史記』夏本紀に「太史公曰、禹為姒姓」  
とあるように、夏の始祖の禹の姓が「姒」であり、「姒」  
姓の氏の中に「褒氏」がある。

褒姒の周辺での「姒」姓の女性として著名な存在は、  
『史記』卷三五・管蔡世家第五にみえる「太姒」であり、  
彼女は周の文王「西伯・昌」の後妃で、周の初代皇帝武  
王の母である。周王朝をはじめた武王の母の「太姒」と、  
周の実態が滅亡した幽王の後が「褒姒」であるのは、偶  
然の対応ではなく、おそらくは意図された対応であろう。  
「姒」が夏王朝の姓であり、「褒姒」の怪異譚に夏王朝の  
龍が登場するのは、夏・殷・周の三代をひとまとまりの  
「聖代」とみなす意識のためであろう。

周王朝の幽王の「褒姒」の实在はその怪異譚からして  
もかなり怪しいのであるが、殷王朝の紂王の「妲己」は

さらに怪しい。『史記』の殷本紀では、「周武王遂斬紂頭、  
梟之大白旗。殺妲己」と、武王は自殺した紂王の屍の頭  
をはねて、それを白旗にかかけ、妲己を殺したとある。

ところが『史記』の周本紀では、紂王の頭をとる場面は、  
「遂入紂死所、武王自射之、三發而後下車。以輕劍擊之、  
以黃鉞斬紂頭。懸大白之旗」ときわめて詳細であるが、  
つづく記述は「已而至紂之嬖妾二女。二女皆經自殺。武  
王又射三發。擊以劍、斬以玄鉞、懸其頭小白之旗」との  
みあり、妲己のことは記されていない。

この「二女」と妲己の関係は、合理的な説明がつか  
なくもない。すなわち西伯昌「文王」は讒言されて紂王に  
より獄につながれるが、西伯昌の家臣が紂王に美女・奇  
物・善馬を献上して釈放を願い、西伯昌は放免されたこ  
とが、殷本紀にも周本紀にも記されている。この献上さ  
れた美女と妲己の合計二人とすれば、合理的な説明はつ  
く。

しかし、献上されたこの美女は、周本紀では「有莘氏  
美女」とあり、有莘（ゆうしん）氏に属する。「有莘氏美  
女」が『史記』にみえるのはここだけではなく、夏王桀  
を打倒して殷王朝を開いた湯王の後妃は「有莘氏」であ  
る。加えてこの湯王の「有莘氏」には、湯王の名臣とし

て名高い「伊尹（いいん）」が料理人として付き添い、伊尹はそこから出世していった。つまり有莘氏の美女は、殷王朝の開始と終末に現れて対応するのであり、きわめて作為性が強い。

さらに伊尹については、殷本紀に夏王朝に赴いて桀王の臣下となったが、桀王を憎んでふたたび湯王に仕えたとする。この間の事情を説明する材料は『史記』にはないが、『太平御覧』卷二三五皇親部所引『竹書紀年』では、「后桀伐岷山、岷山女于桀」二人、曰琬、曰瑛。桀受二女、無子、刻其名于苕華之玉、苕是琬、華是瑛。而棄其元妃于洛、曰末喜氏。末喜氏以與伊尹交、遂以間夏。」とある。桀王は岷山を伐ち、岷山は桀王に二人の女、琬という女と瑛という女を献上した。桀王は二人の女を受納したものの、子がなかったので（名を残すために）玉に名を刻ませた。その玉を「苕華（ちようか）之玉」と名づけ、苕は琬のこと、華は瑛のこととした。桀王は元の妃の末喜氏を洛水に棄てたが、末喜氏は伊尹と交わって、遂に夏王朝を交代させた、とある。

ここに引用した『竹書紀年』の桀王と二人の美女は、前に掲げた『史記』周本紀の紂王と二人の美女との対応関係の存在を疑わせる。よく知られているように夏の桀

王は、殷の紂王と並び称されることの多い、暴虐な悪王で王朝を滅亡させた張本人である。『史記』の殷本紀にはすでに(3)で見たように、紂王には人並みはずれた能力があったと記される中に「手格猛獸（手で猛獸と格闘でき）」とあったが、『史記』卷二五・律書第三には、「夏桀・殷紂、手搏豺狼、足追四馬、勇非微也。百戰克勝、諸侯懼服、權非輕也」とある。「桀・紂」と並称されることにより、一方のイメージは他方のイメージをも喚起し、次第に共通する像が成立してゆくのである。このような繰り返しは、当然のことながらそれぞれに配された女性像にもいえることである。

夏桀王・殷紂王・周幽王の三人に配された末喜・妲己・褒姒について、『国語』晋語に「昔夏桀伐有施、有施人以妹喜女焉。妹喜有寵、於是乎與伊尹比而亡夏。殷辛伐有蘇、有蘇氏以妲己女焉。妲己有寵、於是乎與膠鬲比而亡殷。周幽王伐有褒、褒人以褒姒女焉。褒姒有寵、生伯服、於是乎與虢石甫比、逐太子宜臼而立伯服。太子出奔申、申人・鄆人召西戎以伐周、周於是乎亡。」とある。ここでは、末喜（妹喜）・妲己・褒姒は、滅亡させられた国から献上された美女が、男と結んで滅亡させた国を滅ぼすという同一の因果譚に整理されている。

## 七 まとめにかえて

さらに繰り返しの大きな問題としては、岡村秀典氏が紹介している陳夢家氏が指摘したという、『史記』の夏王朝の王統譜と殷王朝の王統譜の半数が酷似する問題がある。『史記』の殷王朝の系譜は、殷墟出土の甲骨文の王統とほぼ一致するといわれるから、殷王朝の王統譜を参考に、それを繰り返す形で夏王朝の王統譜が形成されたのであろう。これが司馬遷の手になるものかどうかは問題ではない。まさに「歴史は繰り返す」のであり、逆に繰り返さないような歴史は、何の意味もそこには求めることができないと古代の歴史編纂者は考えたに違いないのである。

夏王桀はその終末にあたり、(1)に掲げたように、自分を殺すことになる殷の湯王を獄に収容しながら、釈放して逆に自分が打倒されることになる。殷王紂もその終末に、すでに記したように西伯昌を獄に入れながら、美女と交換に釈放し、西伯昌の息子武王によって打倒される。

またすでに引用した(3)には、紂王が「好酒淫樂」で

あり、「慢於鬼神」であったとあるが、紂王の曾祖父にあたる帝武乙（ぶいつ）は、殷本紀に「無道」であり、人形を作ってこれを「天神」と名づけ、その人形と賭け事をして人形が勝たないので、天神を侮辱した。また革袋に血を入れて「上からつるし、下から」これを討って「射天（しゃてん）（天を射る）」と命名したとある。この革袋に血を入れてこれを射るという「射天」のことは、『史記』卷三八宋微子世家の「王偃」のところにもみえ、この「射天」と「淫於酒婦人」と、諫める臣下をたやすく射殺したことにより、王偃は「桀宋」（宋の桀王、桀王の宋版）と呼ばれたとある。実際には桀王は「射天」とは何の関係もないが、「射天」のようなことは桀王にも当然にあつてしかるべきことと考えられていたことがうかがえる。

紂王の血統をさかのぼると「射天」の曾祖父の帝武乙があり、武乙の祖父の帝祖甲も「淫乱」であり殷が衰えたとある。桀王の血統では、「龍」にまつわる部分で引用した(7)に「好方鬼神、事淫乱」とされる帝孔甲が、桀王の曾祖父である。治世が乱れたり衰えたりする原因に「徳」を修めないことがあり、それがさまざまな悪事を好み、鬼神を侮辱し、淫乱である形で歴史に記述され

る。各王朝を滅亡に導いたり、決定的な弱化をもたらした王は、その代表であるから、そこにさまざまな「不徳」の物語が集中して記載されるのである。

紀元前一〇世紀から紀元前六世紀までの「詩」を集めた『詩経』大雅・蕩之什に、「殷鑒不遠、在夏后之世」〔殷の鑑は直前の夏王朝にあるのだ〕とあるように、古来から現在の問題を過去に投影して解決の糸口を発見したいという意識は、人間に普遍的な意識であり、歴史を記述する根本に存在する意識である。過去世にあった現象が事実であるかどうかというような詮索は、二次的に発生する意識であり、むしろ歴史を記述する意識を批判するものにすぎない。そのような批判的意識をもって歴史は記述されたわけではなく、歴史を記述しよう、編纂しようとする意識は、むしろ繰り返しを是認ないし強調・力説するものである。

秦の始皇帝の「焚書」があったとはいえ、豊富に資料の存在する古代中国において、司馬遷が編纂した『史記』にも、繰り返しによる歴史記述が存在し、司馬遷に限らず歴史記述者にとっては、いわば繰り返しこそが歴史記述の本旨でもあった。日本では仏教導入までほとんど文字資料は残っていないと考えられ、導入以降わずか

に残された可能性がある文字資料も、六七二年の壬申の乱での王朝交替により、ほとんど継承できなかった。そうした中で『記』・『紀』が編纂されたのであるから、物語はおろか王名までもが繰り返しの方法により「創造」されざるを得なかったのは、止むを得ないといえれば止むを得ない事情であった。

#### 注

- (1) 宮崎市定『中国史』（初出は岩波全書版、上・一九七七年、下・一九七八年。本稿は『宮崎市定全集』第一巻・一九九三年・岩波書店による。）八〇・八一頁。  
(2) 『史記』の釈文については、吉田賢抗『史記』（一九七三年など・明治書院・新釈漢文大系）、野口定男『史記』（一九七一年など・平凡社）、小竹文夫・小竹武夫『史記』（一九九五年など・ちくま学芸文庫）を参照した。

- (3) 水上静夫『中国古代史の謎』（一九九四年・時事通信社）二一九頁は、『詩経』少雅・正月篇に「赫赫（かくかく）たる宗周（そうしゅう）、褒姒之を滅ぼす」とあることから、褒姒は実在する可能性があるという『詩経』成立の段階で、褒姒の物語が成立していたとはいえても、実在することを立証するものではない。  
(4) 岡村秀典『夏王朝——王権誕生の考古学——』（二〇〇三年・講談社）七八・七九頁。ただし、伊藤道治

『古代殷王朝の謎』（初出一九六七年・角川書店、参照したのは二〇〇二年・講談社学術文庫版）一〇〇頁以下によれば、殷の王統譜はそう簡単なものではないようである。

#### 参考文献

- ・宮崎市定『史記を語る』（一九九六年・岩波文庫）
- ・内藤湖南『支那上古史』『内藤湖南全集』第一〇卷（一九六九年筑摩書房）
- ・内藤湖南『支那史学史』（一九九二年・平凡社東洋文庫）
- ・加地伸行『史記——司馬遷の世界——』（一九七八年・講談社現代新書）
- ・野口定男『史記を読む』（一九八〇年・研文出版）
- ・池田秀雄『史記学五〇年——日・中「史記」研究の動向一九四五—九五年』（一九九五年・明德出版）
- ・伊藤徳男『「史記」と司馬遷』（一九九六年・山川出版社）
- ・吉本道雅『史記を探る——その成り立ちと中国史学の確立——』（一九九六年・東方書店）
- ・藤田勝久『史記戦国史料の研究』（一九九七年・東京大学出版会）
- ・平勢隆郎『新編史記東周年表——中國古代紀年の研究序章——』（一九九五年・東京大学出版会）
- ・平勢隆郎『中国古代の予言書』（二〇〇〇年・講談社現代新書）
- ・平勢隆郎『「史記」二二〇〇年の虚実——年代矛盾の謎と隠された正統観——』（二〇〇〇年・講談社）
- ・新田幸治『司馬遷論攷』（二〇〇〇年・雄山閣）
- ・伊藤徳男『史記の構成と太史公の声』（二〇〇一年・山川出版）